

# 美馬市美馬町の社寺建築

社寺建築班（郷土建築研究会）

黒崎 仁資\*<sup>1</sup> 天毎木孝利\*<sup>2</sup> 大坂 公吉\*<sup>3</sup> 小川 真由\*<sup>4</sup> 小林 慶子\*<sup>4</sup> 坂口 敏司\*<sup>5</sup>  
 酒巻 暢代\*<sup>6</sup> 中野 真弘\*<sup>7</sup> 宮田 育典\*<sup>8</sup> 森兼 三郎\*<sup>9</sup>

要旨：神社は小社殿を除いてすべて流造であり、台輪が省略されていたり、直線肘木が用いられている社殿が見られた。寺院は寺町に4カ寺が集まり寺院群を形成しており、本堂は方丈形式の六間取が多く、山門は唐門、薬医門、八脚門、二重門とさまざまな形態の門が存在する。お堂、お庵は切妻、宝形屋根の簡素なものも多く、地域と密着した存在である。

キーワード：流造，台輪，直線肘木，寺院群，山門

## 1. はじめに

美馬市美馬町は、徳島県の西部、吉野川中流の北岸に位置し、西は旧三野町、東は旧脇町、北は讃岐山脈の尾根伝いに香川県高松市、まんのう町に接し、南は吉野川を隔てて旧半田町、旧貞光町が対岸にある。

私たち社寺建築班は、8月1日から美馬町に入り、社寺建築を建築学的見地から調査した。神社は34社、寺院は5カ寺、お堂・お庵は16カ所を調査し、案内図（後掲の図26）を作成し、それぞれの建立年代や構造、建築様式などを一覧表（表1・2）にまとめた。そのうち神社1社、寺院4カ寺については詳細調査を行い、実測図を作成した。建立年代については、書籍や棟札から確認できるもの以外は、建築様式から推察した。

また、5カ所から発見された16枚の棟札を調査し、その寸法、年代、大工名等の内容を記録し、一覧表（表3）にまとめた。その結果、建立年代等の確定に大きな成果を得た。

## 2. 美馬市美馬町の社寺建築概要

### 1) 神社建築の概要

今回の調査において、棟札より確認できたもので建立年代が最も古かったものは、猿坂の弁財天神社本殿（図1）で、明治28年（1895）の建立であった。次に古かったのが、丸山の杉尾神社本殿で、明治35年（1902）の再建であった。その他の神社も様式から推察する限り明治以降に建立されたものと考えられる。



図1 弁財天神社本殿

\*1 黒崎建設 \*2 美馬市役所 \*3 大坂工務店 \*4 徳島大学工学部 \*5 坂口建築設計室  
 \*6 Y. M. 設計室 \*7 真建築都市研究室 \*8 宮田建築設計工房 \*9 A + U 森兼設計室

本殿の建築様式は、見世棚造みせだなづくりの小社殿を除いて、すべてのものが流造であった。流造とは切妻、平入ひらいりの本殿正面の屋根を伸ばして向拝こうはいとしたもので、全国的に最も広く分布した造りで、県下においても圧倒的に多い様式である。規模は柱間はしらまの数で表し、八幡はちまんの八幡神社本殿（図2）が二間社で最も大きく、その他はすべて一間社であった。

美馬町の神社建築の特徴としては、1つは台輪が省略されていることである。台輪とは柱の上部に設けて横方向をつなぎ、剛性を高めるための部材で、東宮上やまと おおくにたまの倭 大国魂神社本殿（図3）をはじめ、6社の本殿で台輪が省略されていた。

2つ目は中鳥いざなみの伊射奈美神社本殿をはじめ、5社の本殿が身舎もやの回りに縁を持たず、妻飾りや頭貫つかかざ かしらぬき木鼻きばなの彫刻もほとんど施されていない、簡素なものである。

3つ目は角材のまま一切の加工を施さない直線的な肘木である。肘木とは軒を深くするために設けられる肘の形をした組物のことで、丸山の杉尾神社と猿坂の弁財天神社の本殿で見られた。これらの特徴は隣の三野町や半田町の石堂神社本殿、讃岐山脈を越えて香川県の金刀比羅神社奥の院本殿にも見られ、神社建築という観点から近隣町村との深い関わりが伺える。

## 2) 寺院建築の概要

寺院は5カ寺、お堂、お庵は16カ所を調査した。寺院で建立年代が最も古かったのは願勝寺本堂がんしょうじで、『美馬町史』に江戸中期の享保年間（1716～1735）

の建立であると紹介されている。近年改装され、構造材（柱、虹梁、舟肘木等）以外は新しくなっている。また、次に安楽寺あんらくじの山門が古く、江戸後期の宝暦6年（1756）の建立であると『徳島県の近世社寺建築』に紹介されている。禅宗様の色濃さんげんさんい三間三戸二階二重門で入母屋造の本瓦葺き、朱塗りを施されており、ゆえに安楽寺は赤門寺と呼ばれている。

また、美馬町の寺院にはさまざまな種類の門がある。唐破風屋根を載せたものを唐門から はふといい、林照寺りんしょうじの山門は正面前後に唐破風のある一間一戸の向唐門である（図4）。本柱の位置が門の前方にずれているのを薬医門さいきょうじといい、西教寺さいきょうじの山門は三間一戸の薬医門で、常念寺じょうねんじの山門は一間一戸の薬医門である。柱の数が増えていくと四脚門、八脚門といい、八脚門とは本柱が4本で、その前後に控柱が2本ずつで計8本になるので、これを足とみて八脚門と呼ばれている。願勝寺の山門は三間一戸の八脚門である。二階建ての門を楼門ろうもんといい、上層、下層ともに屋根を付けたものを二重門という。安楽寺の山門は二重門である。

お堂、お庵では小長谷の大師庵（図5）が最も古く、様式から判断する限り、明治時代に建てられたものと推察される。宝形造りの本瓦葺きで、広一間の縄破風の向拝を持つ。その他は比較的新しく木造あるいはブロック造で、切妻造り又は宝形造りの簡素なものが多く、その多くが集会所等に利用されており、お花やお供え物も数多く祀られ、お堂が生活の一部として信仰されている様子が伺える。



図2  
八幡神社本殿



図4  
林照寺の向唐門



図3  
倭 大国魂神社  
本殿妻飾



図5  
小長谷の大師庵

### 3. 美馬市美馬町の各社寺

#### 1) 杉尾神社本殿 (表1-17)

所在地 - 丸山183

[本殿] 木造 一間社流造 銅板葺

身舎 - 円柱 (粽) 腰長押 内法長押 頭貫木鼻  
 (直線) 台輪留 三手先 詰組 板支輪 通  
 肘木 連斗 二軒繁垂木 切石積基壇 (和泉  
 砂岩) 妻飾・大虹梁 二重虹梁

向拝 - 角柱 (几帳面) 虹梁型頭貫木鼻 (直線)  
 皿斗 出三斗 中備 彫刻 (右卍紋) 手挟  
 階5級 (木口) 昇擬宝珠高欄 浜床  
 腰組・二手先 通肘木 連斗 板支輪 縁・  
 四方樽縁 背面隅行障子 擬宝珠高欄

千木 - 垂直2本 堅魚木 - 2本

(図6~9)

この社は、美馬町の東端、丸山に鎮座し、杉尾姫  
 霊神を祭神とする。

本殿は、一間社流造銅板葺きの社殿で和泉砂岩の  
 切石積基壇に載る (図7)。身舎部分は、円柱を内  
 法長押と腰長押で固め、柱頭には頭貫と台輪留を載

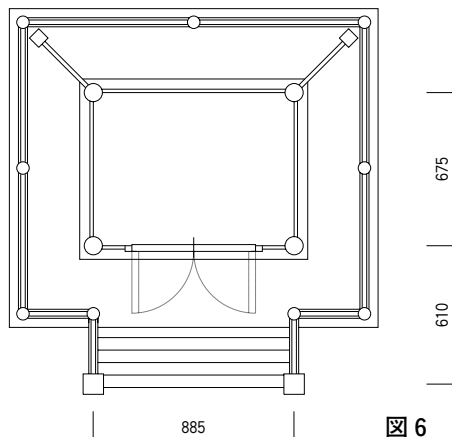


図6 本殿平面図

せる。頭貫木鼻は、彫刻を施さず、切放しの直線木  
 鼻としている。組物は、三手先とし、中央に同様の  
 詰組みを置き、通し肘木で繋ぎ、連斗を填める。肘  
 木の先端も、丸みを持たない切放しの直線肘木とし  
 ている。軒は、二軒繁垂木とする。妻飾りは、二重  
 虹梁の上に角ばった束が載る (図8)。向拝部分は  
 几帳面取の角柱を、虹梁型頭貫で固める、この先端  
 の木鼻も直線木鼻としている。柱頭部には大斗の下  
 に皿斗を置いた出三斗の組物で丸桁を受ける。身  
 舎側に手挟を付ける。頭貫上部の中備えには、右卍  
 の紋を填める。縁は四方に樽縁を回し、背面隅行障  
 子を付け、擬宝珠高欄を載せる。腰組は二手先とし、  
 ここも直線肘木としている。浜床を張り、階5級  
 (木口階段) に昇擬宝珠高欄を付ける。

建築年代は、棟札から明治35年 (1902) の再建で  
 あることが確認できた。大工は、三好郡三野村大字  
 加茂宮村 桂萬吉高光、同重守、藤島林左エ門と棟  
 札 (図9) に記述されている。直線肘木を持った組  
 物は、徳島県の西部で明治期に建立されたものに多  
 く見られ、三野町在住の大工によるもの、また、そ  
 の流れの大工の手によるものと考えられていたが、  
 この本殿も明治期で三野町在住の大工の手によるも  
 のであることが確認できた。



図8 本殿組物



図7 本殿全景

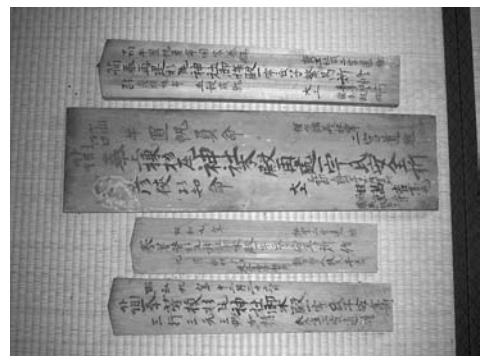


図9 棟札

## 2) 願勝寺 (表2-A)

所在地－願勝寺 8

[本堂] 木造 桁行<sup>けたゆき</sup>16.048m 梁間<sup>はりま</sup>16.834m

入母屋造 本瓦葺 向拝一間

享保年間 (1716～1735)

主屋外回－角柱 切目長押 内法長押 舟肘木

妻飾・大虹梁 二重虹梁 大瓶束 蕪懸魚

内陣・外陣－角柱 格天井 (素木)

向拝－縹破風 角柱 (几帳面) 出三斗 礎盤 虹

梁型頭貫木鼻 (拳) 階五級 二方切目縁 二

軒半繁垂木 中備 蟻股

[山門] 木造 三間一戸八脚門 桁行7.7m 梁間4.9

m 入母屋造 本瓦葺

円柱 腰貫 虹梁型内法貫 頭貫 木鼻 (4

枚) 台輪 (2段) 出三斗 礎盤 中備 (大

瓶束笏型付、卍型) 二軒繁垂木

(図10～13)

本堂は享保年間 (1716～1735) の建立であると、町史にも紹介されており、美馬町内の寺院建築では最古の建物である (図11)。平入り入母屋造、本瓦

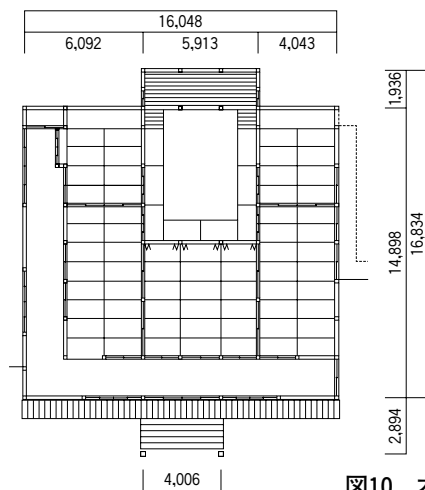


図10 本堂平面図



図11 本堂正面

葺で広一軒の縹破風向拝を持つ。八間四面の方丈型式の六間取りで、天井は格天井で彩色はない。近年改装され、柱、外部長押、肘木、大虹梁、二重虹梁等は建立当初の材が残っているが、その他の部材は新しくなっている。

山門は平入り入母屋造、本瓦葺の三間一戸八脚門 (図13) で、中央通路両脇には、金剛力士像が向かい合わせで安置されており、正面は縦貼りの板で塞がれている。また、正面中央の柱間には、唐草模様の彫刻が施された火灯窓風の化粧板が取り付けられている。中央通路天井は、格天井で柱間上部は透かし彫りの欄間で仕切られ、脇間天井は鏡天井で貼られている。柱頭部は、頭貫の上に狭間板を挟んで二段の台輪が載り、柱間の狭間板には、中備として卍型や大瓶束笏型付を充て、柱頭部には独鈷を模った彫刻が施されている。虹梁型内法貫と頭貫間の2枚の壁板には菱模様の地紋彫りがあり、各隅柱からは4枚の木鼻が突き出ており、両端の木鼻が彫刻の無い切り放しなのに対して、虹梁型内法貫と頭貫に挟まれた壁板の木鼻

には、唐草の彫刻が施されているなど、独創的な意匠が随所に見られる (図12)。



図12 山門柱頭部



図13 山門正面

### 3) 安楽寺山門 (表2-B)

所在地-宮西11

木造 三間三戸二階二重門 入母屋造 本瓦葺 円柱 (粽柱) 宝暦6年 (1756) 棟札写

下層-頭貫木鼻 (拳) 台輪 台輪留 柱筋・虹梁型頭貫木鼻 (拳) 控柱筋・虹梁型頭貫木鼻 (拳) 虹梁型内法貫 詰組彫刻 (鬼, 蓮華) 井桁詰組 彫刻裏股 格天井 二手先 (尾垂木付) 井桁組肘木 (大斗無) 井桁詰組 二軒繁垂木 棧唐戸

上層-切目貫 頭貫木鼻 (拳) 台輪 台輪木鼻 三手先 (尾垂木付) 詰組 二軒扇垂木 火灯窓 (板菱組模様) 土壁 妻飾・出組 虹梁 蛇腹支輪 詰組 大瓶束笈形付 縁・四方切目縁 腰組・出組 逆蓮高欄

(図14~17)

当寺は、平安時代に真如寺をいう天台宗寺院であったが、正元元年 (1259) に浄土真宗に改宗し、江戸中期には四国四県に末寺をもつ名刹で、朱塗りの山門があることから「アカモンデラ」(赤門寺)と呼ばれている。山門は、桁行8.09m、梁間5.13m、入母屋本瓦葺の三間三戸二階二重門で中央及び両脇に棧唐戸がつく。今回棟札は確認できなかったが、

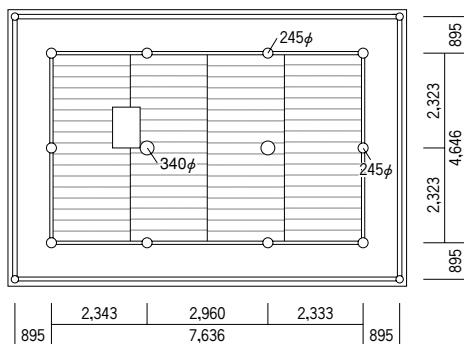


図14 上層平面図

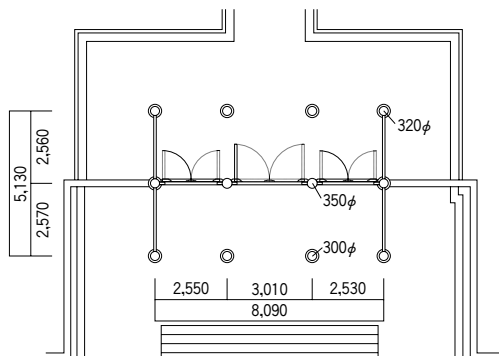


図15 下層平面図

近世社寺建築の記述によると、建立は宝暦6年 (1756) 棟札写とあり、江戸後期の建物である。禅宗様の礎盤のうゑに粽柱が立ち、頭貫の上に台輪が載る。

特徴としては、下層の組物に斗供を省略して、柱を桁まで伸ばし、柱を取り巻くように井桁に組んだ肘木と、壁付け方向のすけ材を交互に積み上げ軒を受けるといった独自の形式である (図16)。それに対して、上層の組物は正統的な禅宗様 (唐様) 三手先組物で柱頭部に大斗を載せ肘木で受ける。火灯窓、縁腰組出組の上に四方切目縁が付き、逆蓮高欄が回る。軒についても下層は二軒繁垂木、上層は放射線状に広がる扇垂木と禅宗様の様式を見せる。内部では、下層の格天井を大斗に代わる井桁詰組を外側に鬼、内側に蓮華の彫刻で支える。上層は通し肘木の上に丸桁が乗り、桁や虹梁で小屋組を支え、中桁まで垂木を引き込んで天井板を張るものの中央部は天井を張らず野小屋を見せる。中央の棟束を支える虹梁型の梁には、梵鐘を吊る穴の痕跡が見られたが、鐘楼門として実際に使われたがどうかは確認できなかった。また、上層の外側の大斗は付大斗であった。全体に禅宗様が色濃く、時代相応に華やかであり、細部に奇抜な意匠を取り入れた、本格的な二重門である (図17)。



図16 下層の井桁組物



図17 山門正面

4) 西教寺 (表2-C)

所在地－宮西13

[本堂] 木造 桁行13.93m 梁間16.07m 入母屋造  
本瓦葺 向拝一間 安政5年(1858)

主屋－角柱 頭貫木鼻 台輪 大斗<sup>えんよう</sup>絵様肘木 二軒  
繁垂木 妻飾・二重虹梁 皿斗<sup>ひらみつど</sup>付平三斗<sup>つれみつど</sup>  
向拝－絶破風 角柱 虹梁型頭貫木鼻 連三斗 中  
備蕞股

[山門] 木造 三間一戸薬医門 切妻造 本瓦葺  
天保14年(1843)

本柱<sup>ごひら</sup>五平柱 控柱角柱 冠木<sup>かぶき</sup> 男梁<sup>おぼり</sup> 女梁<sup>めぼり</sup>平  
三斗 二軒半繁垂木 飛檐板彫刻軒(雲)  
妻飾・二重虹梁 大瓶束笈形付

(図18～21)

当寺は、境内の南に位置する安楽寺の第十一代・  
正宗法師<sup>けいちよう</sup>が慶長14年(1609)に隠居し建てた浄土  
真宗の寺である。

本堂は方丈形式六間取、平入入母屋造、本瓦葺、

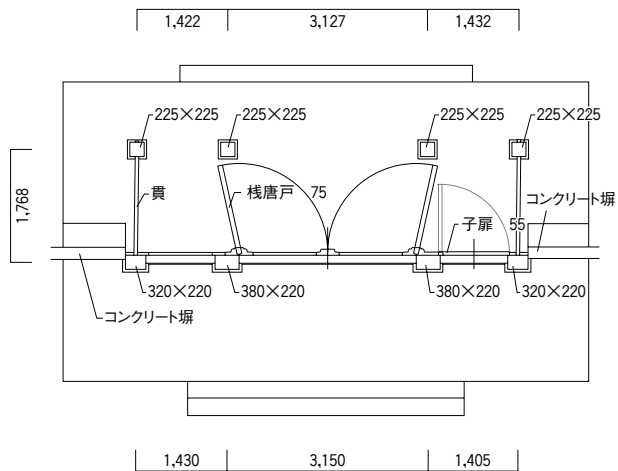


図18 山門平面図

正面中央に一間の絶破風が付く。寺蔵記録によると、  
第十一代・乗音が現在の本堂を再興、安政2年  
(1855)から安政5年までを要している。近年、建  
物内部は改修され、当初の姿を伺うことはできない。  
山門は三間一戸の薬医門で、正面向かって中央に棧  
唐戸、右手に潜戸<sup>くぐりど</sup>、左手に板壁を設け、屋根は切  
妻、本瓦葺とする。棟南鬼瓦の正面に「天保拾四歳  
卯七月吉日」(1843)とある(図19)。

本柱の上に冠木を置き、控柱は貫で繋ぎ、龍の木  
鼻が付く。妻飾は上部に男梁、下部に女梁とし、二  
重となるのが特徴である。その間に蕞股を挟み、先  
端には異様な形の拳鼻が付く連三斗を設ける。また、  
男梁の上に太瓶束笈形を置き、棟木を支える。

破風の飾りは、くんだり・外部側が菊、境内側は雲  
である(図20)。軒は二軒、飛檐垂木は板軒で雲の  
模様が施されているなど、山門の意匠には目を止め  
るものがある(図21)。

平成20年(2008)、当寺の山門、本堂、経蔵が国  
の登録有形文化財に登録された。



図20 山門妻飾



図19 山門全景



図21 山門軒裏

5) 常念寺本堂 (表2-D)

所在地-宗重63

木造 桁行14.224m 梁間14.056m 入母屋造  
本瓦葺 向拝一間 万延元年 (1860)

主屋外回-角柱 切目長押 内法長押 頭貫木鼻  
台輪木鼻 二軒繁垂木 大斗肘木 (花) 内  
法虹梁 飛貫 中備蓐股 妻飾・大虹梁 二  
重虹梁 大瓶束 皿斗付平三斗 蕪懸魚  
内陣-金箔円柱 出組 極彩色 格天井(一間一花)  
外陣-素木造 角柱一部に円柱 格天井 (素木)  
向拝-縹破風 角柱 (几帳面) 皿斗付出三斗 礎  
盤 (黄檗宗風) 虹梁型頭貫木鼻 (龍) 階  
(板) 四級 三方切目縁擬宝珠高欄 二軒繁  
垂木 円形中備彫刻 (菊)

(図22~25)

当寺は鎌倉時代に天台宗として発足し、山号を快  
楽山、院号を蓮華院と号す。室町時代には蓮教上人  
に帰依し浄土真宗に改宗され現在にいたっている。  
安政の大地震により本堂などは倒壊し、本堂は万延  
元年 (1860) に再建された。その後、昭和61年に書  
院が、平成2年には庫裏が改築され、現在の伽藍と  
なった。

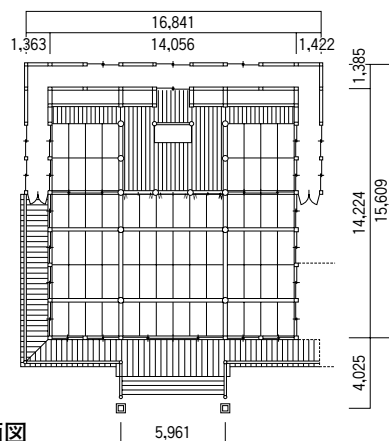


図22 本堂平面図

一間の薬医門を潜ると正面には、平入り入母屋造  
り本瓦葺き、正面中央に広一間の縹破風向拝を付け  
た本堂が東面して建ち、屋根瓦の巴瓦や獅子口瓦  
には、寺紋の九曜が見られる (図23)。

主屋軒裏は二軒繁垂木、柱頭部組物は大斗肘木  
(花) と簡素な造りとする。向拝部は主屋に比べて  
賑やかな意匠となり、柱は角柱の几帳面取り、礎盤は  
黄檗宗風、柱頭部は虹梁型頭貫に龍の木鼻、組物は  
出三斗とし大斗の下部には分厚い皿斗が付き、虹梁  
上部の柱間には円形の彫刻を入れる。主屋との繋ぎ  
は繫海老虹梁とし、三方に切目縁を回し、階や縁の  
角には擬宝珠柱を立てる (図24)。

内部平面は、方丈形式の六間取りで、外陣及び柵  
内は質素に素木で造り、内陣は一変して彩色を施す。  
須弥壇は、練形を多く造り出し、逆蓮柱や蕨手を付  
ける禅宗様のもので、豪華絢爛な金箔張りの入母屋  
造千鳥破風軒唐破風厨子が配されている。特に内陣  
と柵内の結界線から奥部は、金箔の欄間や漆塗りの  
長押、極彩色の出組組物、板彫刻支輪、壁に描かれ  
た天女や極楽浄土の絵画、一間一花の格天井など賑  
やかに仕上げられている (図25)。

近年には、屋根、階及び内部の床や彩色などは改  
修されているが、当寺本堂は、寺町の寺院群とは離  
れているものの、町内における大型本堂群として貴  
重な遺構である。



図24 本堂向拝



図23 本堂正面



図25 内陣格天井 (一間一花)

表1 神社建築調査一覧表

神社名	鎮座地	創建	祭神	旧社格	鳥居様式(材料)
1 玉振神社 たまふり	宗重2	不詳	大国主命 玉振姫命	旧村社	明神(御影) 安政3年(1856)
2 正部神社 しょうぶ	正部21	鎌倉時代*1	伊弉冉命 天照大神 大国主命	旧村社	明神(御影) 明治6年(1873)
3 倭大国魂神社 やまとおおくにたま	東宮上3	不詳	大国魂命 大己貴命	旧村社	明神(御影) 昭和16年(1941)
4 三頭神社 さんとう	三頭山10	不詳	大山祇命 龍神 素盞鳴命 金山彦命 埴安姫命 天御中主命 水波女命 新田義宗命 仁徳天皇 少彦名命 猿田彦命 思兼命 天御影之命	旧村社	しめ縄(御影)
5 八幡神社 はちまん	八幡15	不詳	応神天皇 神功皇后 姫大神	旧郷社	明神(御影)
6 伊射奈美神社 いざなみ	中鳥338	不詳	伊弉冉神 速玉男神 事解男命	旧村社	中山(御影) 明治17年(1884)
7 天都賀佐比古神社 あまつかさひこ	轟32	不詳	級長津彦命 級長津姫命	旧村社	明神(御影) 嘉永元年(1848)
8 大宮神社 おおみや	妙見106	不詳	素盞鳴命	旧村社	明神(御影) 安政3年(1856)
9 若宮神社 わかみや	土ヶ久保23	不詳	天照大神 埴安彦命 二宮尊徳命	旧無格社	明神(御影) 紀元2600歳
10 八坂神社 やさか	滝宮231	不詳	素盞鳴命	旧無格社	
11 八幡神社 はちまん	宮東23	不詳	応神天皇 仲哀天皇 神功皇后	旧村社	明神(御影)
12 天神社	岡97	不詳	菅原道真	旧無格社	明神(御影)
13 農牛神社	ノツゴ4	不詳	大直日命	旧無格社	明神(御影)
14 天津賀佐彦神社	西荒川48-1	不詳	級長戸辺命	旧無格社	ひむろ(木造)
15 弁財天社	猿坂85-3	不詳	弁財天女	旧無格社	明神(御影)
16 若宮神社	坊僧158	不詳	仁徳天皇		
17 杉尾神社	丸山183	不詳	杉尾姫靈神		明神(御影)
18 若宮神社	西段201-2	不詳	仁徳天皇		
19 山神社	池ノ浦163	不詳	大山祇命		
20 松尾神社	梅ヶ久保21	不詳	木花咲耶姫命		
21 水婆女神社	入倉812	不詳	水婆女命		
22 大久保大明神	大久保	不詳			明神(御影)
23 津波大明神社	正部	不詳			
24 八幡神社	入倉	不詳			
25 猿森神社	入倉	不詳			
26 地藏神社	清田	不詳			
27 新賀大明神	平尾	不詳			
28 平野神社	狙ヶ内	不詳			明神(御影)
29 淡島神社	惣田宗	不詳			明神(木造)
30 十二社神社	惣後	不詳			明神(木造)
31 三上神社	大上	不詳			台輪(御影)
32 小笠原神社	城	不詳			
33 妙見神社	妙見	不詳			
34 船玉神社	妙見	不詳			明神(御影)

\*1 美馬町史



平成20年8月末日現在

本殿 建築様式	拝殿 建築様式 向拝	特記事項	A	B	C
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 本瓦葺 向拝：入母屋		彫		
木造 一間社流造 銅板葺	木造 切妻造 棧瓦葺 向拝：庇		○		
木造 一間社流造 銅板葺	木造 切妻造 銅板葺 向拝：入母屋	明治8年(1875)村社となる* <sup>1</sup>	○		○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝：入母屋	明治8年(1875)村社となる* <sup>1</sup> 現在の建物は平成5年(1993)再建	○		○
木造 二間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 本瓦葺 向拝：入母屋	明治6年(1873)郷社となる* <sup>1</sup>	○		○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝：切妻				○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 本瓦葺 向拝：入母屋	明治8年(1875)村社となる* <sup>1</sup> 境内に若宮神社を存す	彫		
木造 一間社流造 鉄板葺	木造 入母屋造 本瓦葺 向拝：入母屋	明治8年(1875)村社となる* <sup>1</sup>	○		
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 本瓦葺 向拝：入母屋				
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 本瓦葺		○		○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 本瓦葺 向拝：入母屋	明治8年(1875)村社となる* <sup>1</sup> 境内に天神社を存す	○		
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝：縋破風		○		
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 棧瓦葺 向拝：切妻				
木造 見世棚造 板葺	木造 切妻造 棧瓦葺				
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝：縋破風	現在の建物は明治28年(1895)建立	○	○	
木造 一間社流造 銅板葺	木造 切妻造 棧瓦葺 向拝：庇				○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 棧瓦葺 向拝：入母屋	実測調査 棟札, 明治35年(1902)の棟札を存す	○	○	
木造 見世棚造 鉄板葺	木造 切妻造 棧瓦葺 向拝：縋破風				
木造 見世棚造 板葺	鉄骨 切妻造 スレート葺				
木造 一間社流造 板葺	木造 切妻造 棧瓦葺				
木造 小社殿	鉄骨 切妻造 スレート葺	西龍王神社とも呼ばれている* <sup>1</sup>			
木造 見世棚造 鉄板葺	木造 切妻造 棧瓦葺	現在の建物は昭和32年(1957)再建			
木造 見世棚造 鉄板葺	木造 入母屋造 棧瓦葺	現在の建物は昭和60年(1985)再建			
木造 小社殿	木造 切妻造 棧瓦葺				
木造 小社殿	木造 切妻造 波トタン葺				
木造 見世棚造 鉄板葺	木造 切妻造 棧瓦葺	現在の建物は昭和27年(1947)建立			
木造 小社殿	木造 切妻造 棧瓦葺 向拝：庇				
木造 一間社流造 鉄板葺	木造 切妻造 棧瓦葺 向拝：縋破風				
木造 小社殿	木造 切妻造 銅板葺 向拝：縋破風				
木造 小社殿	木造 切妻造 波トタン葺				
不明 木造覆屋	木造 切妻造 棧瓦葺				
木造 小社殿	木造 入母屋造 棧瓦葺 向拝：入母屋				
木造 小社殿					
石造 小社殿		現在の建物は平成16年(2004)建立			

A：脇障子 彫は彫刻有り B：直線肘木 C：台輪無し

表 2 寺院建築・御堂建築調査一覧表

寺院名	所在地	開基	宗派	本尊
A 願勝寺	願勝寺 8		真言宗	阿弥陀如来
B 安楽寺	宮西11		浄土真宗	阿弥陀如来
C 西教寺	宮西13		浄土真宗	阿弥陀如来
D 常念寺	宗重63		浄土真宗	阿弥陀如来
E 林照寺	宮西17	永世17年 (1520) *1	浄土真宗	阿弥陀如来
a 大師堂	大久保(有明)			弘法大師, 阿弥陀如来
b 大師堂	正部(野津郷)			弘法大師
c 大師堂	入倉(上久保)			弘法大師
d 大師堂	猿坂			弘法大師
e 大師堂	平野(中村)			弘法大師
f 大師堂	惣田			弘法大師, 不動明王, 観音菩薩 虚空蔵菩薩
g 大師堂	城ヶ丸			弘法大師
h 大師堂	山西屋敷			弘法大師
i 大師堂	平野			弘法大師
j 大師堂	北東原			弘法大師, 観音菩薩, 地藏菩薩 薬師如来, 庚申待塔, 文字塔
k 庚申堂	谷ヨリ西			
l 観音堂	天神			観音菩薩
m 銀杏庵	中山路			虚空地藏
n 大師庵	小長谷			弘法大師
o 大師庵	東宗重			弘法大師
p 薬師庵	妙見			薬師如来

\*1 美馬町史 \*2 徳島県の近世社寺建築

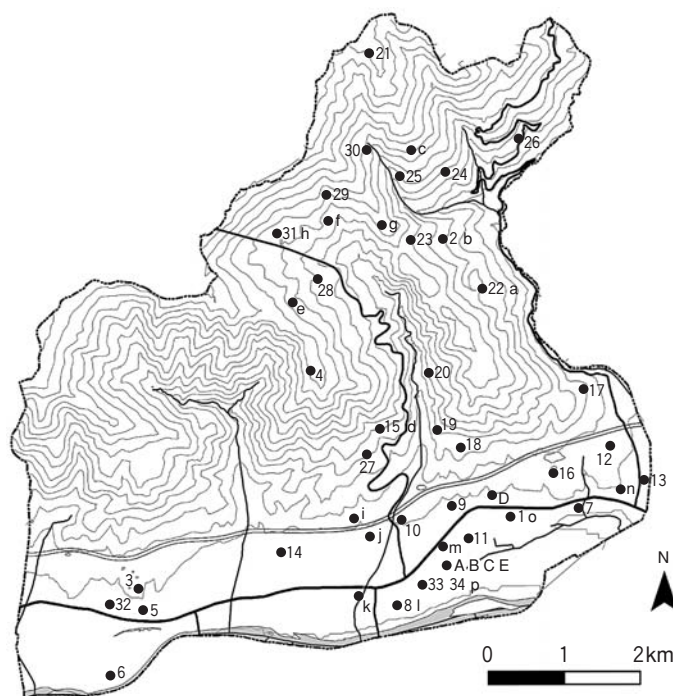


図26 社寺建築案内図

平成20年8月末日現在

建物名	屋根形式	屋根材	建築年代	建物名	屋根形式	屋根材	建築年代	特記事項
本堂	木造 入母屋造	本瓦葺	向拝：縋破風 享保年間 (1716~1735) 建立* <sup>1</sup>	大師堂	木造 宝形造	本瓦葺	宝暦年間 (1751~1763) 建立* <sup>1</sup>	
山門	木造 入母屋造	本瓦葺		山門 (八脚門)	木造 入母屋造	本瓦葺		
本堂	木造 入母屋造	本瓦葺	向拝：縋破風 昭和13年 (1938) 再建* <sup>1</sup>	山門 (二重門)	木造 入母屋造	本瓦葺	宝暦6年 (1756) 建立* <sup>2</sup>	正元元年 (1259) 浄土真宗に改宗* <sup>1</sup>
本堂	木造 入母屋造	本瓦葺	向拝：縋破風 安政5年 (1858) 建立* <sup>1</sup>	山門 (薬医門)	木造 切妻造	本瓦葺	天保年間 (1830) 建立* <sup>1</sup>	
本堂	木造 入母屋造	本瓦葺	向拝：縋破風 万延元年 (1860) 再建* <sup>1</sup>	経蔵	木造 入母屋造	本瓦葺	向拝：縋破風	
本堂	鉄筋コンクリート造	入母屋造	銅板葺 昭和60年 (1985) 再建* <sup>1</sup>	庫裡	木造 入母屋造	本瓦葺		
木造 寄棟造	茅葺に波トタン葺			山門 (薬医門)	木造 切妻造	本瓦葺		
コンクリートブロック造	宝形造			山門 (唐門)	木造 本瓦葺		昭和39年 (1964) 建立* <sup>1</sup>	
木造 切妻造	波トタン葺			鐘楼	木造 切妻造	本瓦葺		
コンクリートブロック造	宝形造							
木造 切妻造	棧瓦葺							
木造 切妻造	棧瓦葺							
木造 切妻造	棧瓦葺							
木造 切妻造	波トタン葺							
木造 切妻造	鉄板葺							
木造 切妻造	棧瓦葺							
木造 切妻造	本瓦葺							
木造 切妻造	棧瓦葺							
木造 入母屋造								
木造 宝形造	本瓦葺							
木造 片入母屋造	棧瓦葺							
木造 切妻造	棧瓦葺							



1 玉振神社



2 正部神社



4 三頭神社



6 伊射奈美神社



7 天都賀佐比古神社



8 大宮神社



9 若宮神社(土ヶ久保)



10 八坂神社



11 八幡神社



12 天神社



13 農午神社



16 若宮神社(坊僧)



14 天津賀佐彦神社



18 若宮神社(西段)



19 山神社



20 松尾神社

表 3 棟札調査一覧表

名称	○は現存建物	番号	西暦	年号	年	干支	月 日	目的	大 工	その他	寸 法					鬼門切	備 考	
											総高	片高	上幅	下幅	厚さ			
杉尾神社	本殿	○	1	1902	明治	35	壬寅	新1月30日 旧34年12月21日	再建	大工 桂萬吉高光 同 重守 藤島林左エ門		699		198	178	17		
	拜殿	○	2	1924	大正	13	甲子	4月27日	再建	大工 喜多林左エ門 藤本政助		575	565	117	98	25		
	本殿		3	1932	昭和	7	壬申	9月26日	葺替	大工 喜多林左エ門		455	446	104	90	18		
	本殿		4	1934	昭和	9	甲戌	12月26日	葺替	なし		517	505	103	88	18		
津波大明神社	本殿		1	1745	延享	2	乙丑	11月13日	建立	藤原氏 泉 吉蔵		548	535	136	122	7	左	
			2	1879	明治	12	己卯			工師 中川清太郎		544	529	89	79	12	左	
			3	1888	明治	21	戊子			大工 杉山茂三郎	小工 伊原金三郎 菅原亀吉 邊見利平 杉山仙蔵	554	545	101	88	20		釘穴の痕跡
	神霊殿		4	1889	明治	22	己丑		造営	削り取り		545	502	176	149	13	左	
	幣殿		5	1906	明治	39	丙午	6月1日	上棟	大工 中川要太 大野松太郎		456	439	92	66	18	右	
	本殿		6	1925	大正	14	乙丑	10月31日	再建	大工 中川仲市		545	530	118	91	15	右	
	本殿	○	7	1985	昭和	60		4月28日	再建	大工 中川治雄 二宮義信		612		106	91	20		マジック書き
			1	1864	元治	元	甲子	9月	建立	大工 藤原義太 同 忠太		458		79	67	17	右	
地藏権現		○	2	1947	昭和	27	壬辰	旧6月24日	建立	大工 尾方隼士 政岡高行		490	475	80	70	10	右	
	弁財天神社	○	1	1895	明治	28	乙未	3月13日	建立	大工 同所 長江口太郎重春 長江兼吉重利 三好郡太刀野 千葉浅吉 郡里村 高田守平	小工 当所 長政太郎 山本敏太郎 重清 谷範二郎	680		143	123	19		昭和6年4月20日記入の文
松尾神社			2	1931	昭和	6	辛未	4月20日	葺替			622		113	113	22		
		○	1	1940	昭和	15	庚辰	旧3月17日	上宣宮	大工 逢坂七三郎	佐官 吉田津喜由	545		112	95	15		紀元二千六百年 今上天皇天下泰平

#### 4. おわりに

今回の調査において、神社建築では直線肘木や、台輪を省略するなどの特徴を見出すことができ、様式的にも近隣町村との深い関わりを確認することができた。寺院建築では本堂をはじめほとんどの建物に本瓦が使われ、何重にも積上げた箱棟には天女や龍などの装飾が随所に施されており、特に4カ寺が集まった寺町では本瓦葺きの大屋根が幾重にも重なり、特有の重厚さを感じさせられる。また、多くのお堂、お庵に、お花やお供物が祀られ、住民の方々が日常的に信仰されている様子が伺えた。

なお本稿では、建築年代を表す上で、江戸時代の年代区分は建築的な特徴から前期を1615～1660年、中期を1661～1750年、後期を1751～1829年、末期を

1830～1867年に区分した。

また、悉皆調査をする上で、神社やお堂の場所の特定に苦勞をしたが、住民の方々のご協力を得て、多くの神社、お堂を調査することができました。この場を借りてお礼を申し上げます。

#### 文献

- 美馬町史編集委員会 (1989)：『美馬町史』。美馬町。
- 徳島県神社庁教化委員会 (1981)：『徳島県神社誌』。徳島県神社庁。
- 奈良国立文化財研究所編 (1990)：『徳島県の近世社寺建築 (近世社寺建築緊急調査報告書)』。徳島県教育委員会。
- 阿波のお堂の風俗研究会 (1988)：『阿波のお堂』。徳島県出版文化協会。
- 徳島県建築士会阿波のまちなみ研究会 (1997)：『阿波の寺社建築』。阿波のまちなみ研究会。